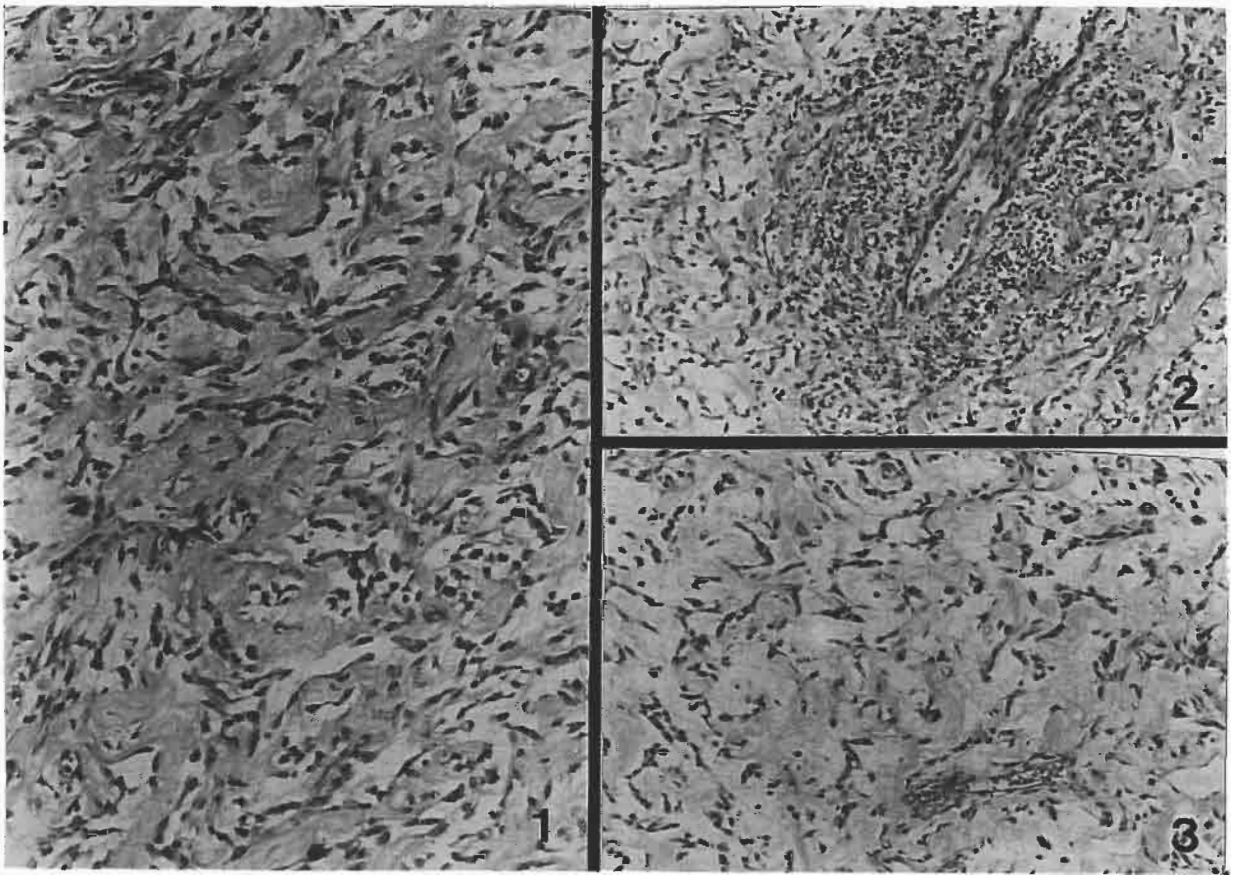


# イヌの皮下腫瘍

麻布大学病理学第一講座出題 第34回獣医病理学研修会標本No.610



動物：イヌ，プードル，11歳，雌。

臨床事項：5年前に飼い主が左側胸部皮下の1.5×1.0 cmの結節に気付いた。1993年1月には同結節が5.0×3.0 cmに増大し，2月に結節表面が自壊，外科的切除。また，この結節に隣接した径3.0 cm以下の結節2個も同様に切除。X線検査では肺野に転移は認められなかったとのことである。この外科的に摘出した腫瘍を10%中性緩衝ホルマリン液で固定したものが送付された。これらの皮下腫瘍の他には臨床的に特記すべき事項はなかった。

肉眼所見：ホルマリン固定後の断面は，充実性に弾性があり，広範な出血を伴っていた。

組織所見：腫瘍の一部には広範な壊死がみられた。腫瘍細胞は紡錘形で，その多くが裂隙状の管腔を形成し（写真1），一層，時に多層に配列していた。形成された腔内には赤血球は殆ど認められなかったが，一部にごく軽度の出血が観察された。基質は膠原線維に富み，一部，硝子化していた。また，リンパ球の集簇（写真2）や水腫性変化の目立つ部位（写真3）が認められた。腫瘍組織中の細網線維の

発達は良好であったが，箱入り像は観察されなかった。腫瘍細胞には大小不同が軽度に認められたが，異型性及び多形性には乏しかった。細胞質は好塩基性であった。免疫組織化学的には殆どの細胞がビメンチン陽性で， $\alpha$ -平滑筋アクチン及びアクチン陰性であった。ごく一部の細胞が第VIII因子関連抗原に陽性反応を示した。腫瘍細胞周囲にIV型コラーゲンは検出されなかった。電顕的に細胞間接着装置は認められず，細胞周囲に基底膜は存在しなかった。しかし，一部の腫瘍細胞には飲小胞が観察された。隣接して存在した2個の結節はいずれも乳腺腺腫であった。

考察及び病理学的診断：管腔形成性の腫瘍であることから，血管肉腫が疑われたが，形成された管腔内に赤血球を含まないこと，基質に浮腫が存在すること，リンパ球性炎症が観察されること，更に電顕的に基底膜と細胞間接着装置を欠くことからリンパ管肉腫と診断した。本腫瘍は家畜では極めて希で，イヌではこれまでに2例の報告を見るのみである。